

武蔵野日曜集会

新生

——ヨハネ伝第3章1～15節——

1994年4月17日

小池辰雄

人あらたに生まれずば 聖霊を受けなければ 水と霊によりて生まれずば 新生 キリスト
と一如の世界 永遠の生命

【ヨハネ3:1～15】

1ここにパリサイ人にて名をニコデモという人あり、ユダヤ人の宰なり。
2夜イエスの許に來りて言う『ラビ、我らは汝の神より来る師なるを知る。
神もし偕に在さずば、汝が行うこれらの徴は誰もなし能わぬなり』³ イエス答
えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見
ること能わず』⁴ ニコデモ言う『人はや老いぬれば、で生まるる事を得んや、
再び母の胎に入りて生まるることを得んや』⁵ イエス答え給う『まことに誠に
汝に告ぐ、人は水と霊によりて生まれずば、神の国に入ること能わず。⁶ 肉
によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり。⁷ なんじら
新に生まるべしと我が汝に言いしを怪しむな。⁸ 風は己が好むところに吹く、
汝その声を聞けども、何処より來り何処へ往くを知らず。すべて霊によりて
生まるる者も斯のごとし』⁹ ニコデモ答えて言う『いかで斯る事どものあり得
べき』¹⁰ イエス答えて言い給う『なんじはイスラエルの師にしてなおかかる
事どもを知らぬか。¹¹ 誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見
しことを証す、然るに汝らその証を受けず。¹² われ地のことを言うに汝ら信
ぜずば、天のことを言わんには争で信せんや。¹³ 天より降りし者、即ち人の
子の他には、天に昇りしものなし。¹⁴ モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人
の子もまた必ず挙げらるべし。¹⁵ すべて信する者の彼によりて永遠の生命を
得ん為なり』

●人あらたに生まれずば

1ここにパリサイ人にて名をニコデモという人あり、ユダヤ人の宰なり。

「ニコデモ」というのはパリサイ派の親玉みたいな人で、いわゆる衆議所の委員の中の委員
長というわけだ。「宰」と書いてあるのはそのことです。



2 夜イエスの許に來りて言う

「夜」に來たのは、キリストの所へ行くと自分がユダヤ教の異端者みたいに思われるものだから、それで夜みなに分からないように來たわけです。

『ラビ、我らは汝の神より來る師なるを知る。神もし偕ともに在いまさずば、汝が行う

これらの徴は誰もなし能わぬなり』

キリストに向かつて、いきなりこんな説明的な事を言うのはおかしいくらいです。少し観念的な信仰だ。もつたいぶつて語っているわけです。簡単に

「あなたには降参します」

というような言い方をしなければ本当ではない。これがニコデモらしい言葉だ。

3 イエス答えて言い給う『まことに誠に汝に告ぐ、人あらたに生まれずば、神の国を見ること能わず』

ニコデモは「あらたに生まれ」てない。だから、キリストが単刀直入にいきなりやつけたわけです。「あらたに」という言葉は「上から」とも訳せる言葉で、

「上から生まれなければ、靈界から生まれなければ」

ということ。我々が自然に生まれたことは地的なことですが、

「天界からうまれなければ、靈的誕生をしなければ、上から生まれなければ神の国を見ることできない」

ということです。全くそのとおりです。モーセから始まっているところの旧約の世界では、この

「新たに生まれる」

ことができない。ただ、有名な預言者たちは、靈界から生まれるような、靈的な祈りの世界を受けているから、彼らはある意味において「新たに生まれる」の先駆者たちだった。アモス、ホセア、イザヤ、エレミヤといういわゆる文字で書き残した預言者達です。

私なんかも内村鑑三先生の群れにいたころは、まだ新たに生まれていなかった。気持ちの上では、新たに生まれたかの如き気持ちでいましたけれども、本当の意味で新たに生まれるのは、聖霊を受けなければ新たに生まれることはあり得ない。無教会信仰では聖霊のバプテスマということは聞いたことがない。

「十字架、十字架」

とばかり言つて、キリストの十字架の贖いだけが無教会信仰の根幹だった。十字架の贖いは土台ですけども、それから聖霊にこなければダメなので、キリストの直弟子たちはペンテコステでみな聖霊を受けている。

「祈つてまつていろ、そうしたら、お前たちは聖霊を受けて新しく生まれるぞ」

と、キリストは預言されておられる。

今の一般の教会でも、本当に聖霊を受けて新たに生まれているクリスチャンが一体どれ



くらいいるか、というようなわけです。あいかわらずダメなわけです。聖書の研究ばかりしている。研究でもつてその世界に入れない。これが

「人あらたに

上から、霊界から生まれなければ、霊的誕生をしなければ、聖霊を受けなければ

神の国を見ること能わず」

ということになるわけです。十字架止まりではダメだ。キリストの弟子たちも、ペテロも聖霊を受けるまではダメなんだ。

●聖霊を受けなければ

使徒行伝1章に、

「テオピロよ、我さきに前の書をつくりて、
「前の書」とはルカ伝のことです。

凡そイエスの行いはじめ教えはじめ給いしより、²その選²び給える使徒たちに、
聖霊によりて命じたるのち、

「聖霊によりて命じた」と書いてある。

挙げられ給いし日に至るまでの事を記せり。³イエスは苦難^{くるしみ}をうけし³のち、
十字架のことです。

多くの慥^{たしか}なる証をもて、己の活きたることを使徒たちに示し、四十日の間、
しばしば彼らに現れて、神の国のことを語り、

これは復活のキリストです。

⁴また彼等とともに集りいて命じたもう『エルサレムを離れずして、我より
聞きし父の約束を待て。⁵ヨハネは水にてバプテスマを施ししが、汝らは日な
らずして聖霊にてバプテスマを施されん』

ちゃんと霊界のキリストがそう言っていらいっしやる。それから本当のことが始まるぞ、と
いうわけです。

⁶弟子たち集れるとき問いて言う『主よ、イスラエルの国を回復し給うは此
の時なるか』⁷イエス言いたもう『時また期は父のおのれの権威にうちに置き
給えば、汝らの知るべきにあらず。⁸然れど聖霊なんじらの上に臨むとき、汝
ら能力^{ちから}をうけん、而してエルサレム、ユダヤ全国、サマリヤ、及び地の極^{はて}に
まで我が証人とならん』(使徒1:1～8)

聖霊を受けなければ証人になれない。キリスト者は、キリストの証し人というのは十字架
を土台にした聖霊を受けなければダメだと、キリストがはつきり言っただけで

「人あらたに生まれずば



天から生まれなければ、霊界から生まれなければ、聖霊を受けなければ、
神の国を見ることはできない」
ということですよ。

●水と霊によりて生まれずば

ニコデモはあいかわらずユダヤ教なんです。だから、とんでもないことを聞いている。

4 ニコデモ言う『人はや老いぬれば、争^いで生まるる事を得んや、再び母の胎に入りて生まるることを得んや』

こういうばかなことを言っている。

5 イエス答え給う『まことに誠に汝に告ぐ、人は水と霊によりて生まれずば、

神の国に入る^くこと能^{あた}わず。

「水」というのは悔改^{くわいあらため}のことです。洗礼のヨハネによる悔改のバプテスマ。悔改めて

「自分はまちがっていた」

と降参して、それから今度は聖霊を受ける。「水と霊」とはそういうことです。悔改をして、それから聖霊を受けなければ、本当に生まれたことにはならないので、神の国に入ることできない。神の国の資格はそういうことだという。クリスチャンは神の国の人なんだけれども、それが本当に神の国の人であるかということです。何もひとのことを言う必要はないけれども、キリストに

「まだまだだ」

と言われている。それだけはっきりしている。

「水と霊」とは、悔改とキリストの霊のこと。聖霊はキリストの霊です。キリストを抜きにして「聖霊」なんて言ったってダメです。ヘタするとサタンの霊と切り替わってしまう。キリストの霊を受けるときには——悔改という姿は平伏^{ひれふ}しです——全身的な平伏し、魂が降参している姿。平伏しの姿が私が言うところの「無」です。我が無い、世界です。

6 肉によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり。

「自然の生命は、自然の生まれかたはどこまでも肉だ」

と。「肉」とはこの世的ということ、現世的、現世中心で、神中心でないこと。現世中心、自己中心が「肉」ということです。

昨日、三谷隆正という人の本を読んでいたら、

「汝自身たれ」

と書いてあった。英語でいうと、「ビー ザイセルフ (ユアセルフ)」という。「汝自身たれ」とは素晴らしいことだ。

「人の顔はみなそれぞれ違う。神さまは一人一人を絶対的な存在として造った。人真似をする必要はない。ところが、日本人はとかく人真似が多くてこまる。人真



似は要らん。自分自身であれ」

と書いてます。これはヘタするといわゆる自我主義になる。自我主義ではダメなんだ。

「汝自身」とは、どこまでも神さまから賜りたる存在、お預かりの存在です。けれども、それはその人らしきがある。自分らしきをなくしたらダメだ。その人らしきという、いい意味の個性だ。「個性をはっきりもて」ということ。ドイツ人は個性が、自意識が強い。自意識がヘタすると、いわゆる自我になつたらいかんけれども。個性は使命的存在、みな神さまから使命を受けとっている。一人一人はみな使命的存在です。人のため、世のため、国のため、世界のために尽くす使命をもっている。それが本当の個性です。個性の自覚は、使命的存在であることを自覚しなくてはいかん。これは大事なことです。

これは正に使徒なんだ。みな使徒なんです。「使徒行伝」というけれども、我々はみな使徒なんです。「使徒」というのはいい言葉だ、使わされた者、使わされた徒、天から神さまから派遣された存在。キリストの使徒たち。我々クリスチャンはみな使徒なんだ。

●新生

悔改め平伏して、聖霊を受けたときに、これは新生となる。

「人あらたに生まれずば」

とは、

「ひと天から生まれなければ、霊界から生まれなければ、霊的誕生をしなければ」

ということです。それが新生です。天生でもいい、天から生まれる。これが、

「人は水と霊によりて生まれずば、神の国に入ること能わず」

ということなんです。

十字架の前で赦されたから悔改める。人間的な主観的な悔改だけではダメだ。十字架の贖罪を受けとるから、本当に贖罪を受けとれば、そこには今度は聖霊がくる。ところが一般は「十字架、十字架」と言つてばかりいて、さっぱり聖霊の世界にこない。

6 肉によりて生まるる者は肉なり、霊によりて生まるる者は霊なり。

「肉」とは、この世的だということ。いわゆる自然的な生まれかたは、どこまでも地的であつて天的でない。神中心でない、人間中心だ。それが「肉」ということ。肉欲という意味ではない。自己中心ということ。ところが、聖霊で生まれた者は、神の霊で、キリストの霊で生まれた者は、これは本当に「霊」である。

7 なんじら新に生まるべしと我が汝に言いしを怪しむな。

天から生まれるということを怪しむなと。

8 風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、何処より来り何処へ往くを知らず。すべて霊によりて生まるる者も斯のごとし』

これは見ようとしたつて分からない。自分で体験するよりか仕方がない。直かに身体で体



驗しなければダメです。

私が聖霊を受けたのは阿蘇で手島さんと集会をしたときで、全身しびれたね、

「あつ、これが聖霊のバプテスマだ」

と感じた。そうしたら、自然が光って見えた。今でもありありと思い出します。なるほど今までの無教会信仰ではダメだということがはつきりした。「信仰、信仰」といつて自分の信仰ばかりを問題にして、ふたことめには「信仰」と言つて、

「信仰のみの信仰だ。行為おこないを問題にするな」

と、今度は正にそれがみなお題目になってしまっている。

ところが、本当の信の世界に入ると、信、行、一、如になつてゐる。どんなにその行為が破れたような行為でも一向差し支えない。質的には信と一つである。質的に同じなんだ。これは大事なことです。信と行とが同質なんです。

「信仰してから、それから行為を大いに考えましょう」

なんて、そんな二段構えのことをやつたつてダメなんだ、そんな行為は。実は信ずるということ自身が全身的な内的な行為、霊的行為なんです。「信ずる」とは、「キリストの中に自分を投げ入れる」ことです。そして、キリストの存在の一部分となる。

「キリストの存在の一部分となる」

ということ、内村先生がいつか書いていたな。

●キリストと一如の世界

要するに、キ、リ、ス、ト、と、一、如、の世界です。一如的存在になる。こうやって対しているのではなくて、その中に入つてしまふ。朝露を見ると、太陽で光る。あれは朝露のしずくが太陽と一つになつてゐる。自然現象を見ると、そういうことが分かる。みな溶け合つてゐる。ゲートという人はそういうような目で自然を見ていた人だ。ゲートという魂は大自然と融合したような魂だから、ああいう偉大な詩人になる。対象的なものを見ているうちはダメなんです、その中に入つて溶けてしまわないと。

「汝が我か、我が汝か」

というような世界です。

私は今「飄ひょう」という字の懸け軸を見ているけれども、この素晴らしい字をジーツと見て、文字と一つになるような見かたをすると、本当にその字を見ていることになる。ただ外側から筆の使い方がどうだこうだと、そんなことを研究しているうちはダメなんだ。

とにかく、そうなると宇宙的になる。星を見れば星となる、太陽を見れば太陽となる。風は見えない。風は見えないけれども、風と一つになることはできる。海の波を見れば波となる。そういうような柔軟な魂にならないとね。だから、海で波をくぐつて泳ぐのは楽しい。泳ぎも、浮こう浮こうとすると却つて沈む。疲れる。ところが、波に自分をまかせてしまふと楽に



泳げるようになる。

キリストはそういった神秘的な融合性をちゃんと知っていていらつしやるから、こういうことを言われるわけです。

8 風は己が好むところに吹く、汝その声を聞けども、何処より来り何処へ往くを知らず。すべて霊によりて生まるる者も斯のごとし⁹。ニコデモ答えて言う『いかにで斯る事どものあり得べき』¹⁰ イエス答えて言い給う『なんじはイスラエルの師にしてなおかかる事どもを知らぬか。』¹¹ 誠にまことに汝に告ぐ、我ら知ることを語り、また見しことを証す、然るに汝らその証を受けず。¹² われ地のことを言うに汝ら信ぜずば、天のことを言わんには争で信ぜんや。

「霊界のことはなおさら分らん。地上の現象すら分らないでしょうがないのに、いわんや霊的な現象のことはなおさら分らん」とキリストが言っている。

●永遠の生命

13 天より降りし者、即ち人の子の他には、天に昇りしものなし。

「人の子」という言い方はダニエル書にある言葉です。「メシヤ」の隠れた言葉なんです。

「13 我また夜の異象の中に観てありけるに人の子のごとき者雲に乗て来り日の老たる者の許に到りたればすなわちその前に導きけるに、¹⁴ 之に権と栄と国とを賜いて諸民、諸族、諸音をしてこれに事えしむ。その権は永遠の権にして移りさらず又その国は亡ぶることなし。」(ダニエル7・13～14)

これはキリストの預言です。キリストは「永遠の権」をもっている。キリストの国は亡びない。ダニエル書というのは神秘的な不思議な書です。

「²⁷ 而して国と権と天下の国々の勢力とはみな至高者の聖徒たる民に帰せん。

至高者の国は永遠の国なり。諸国の者みな彼に事えかつ順わんと。」(ダニエ

ル7・27)

霊的天国、それはもう地上から始まっている。だから、我々は亡びない。

悪人は地獄に行つて生きる。ダンテがちゃんと書いています。善き魂は天国へ行つて生きる。どっちも死にはしない、生きるんです。地獄で生きたら大変だ、ダンテが書いているように。地獄の霊どもは死のうと思つても死ねない。なお苦しみを受けている。

とにかく、私はまだ読みたい本もいくらでもあるし、勉強したいことはいくらでもあるし、百歳まで生きたつて間に合わないね。しかし、年は数えないことにした。幾つまで生きましようなんて、そんなことは考えない。決して死なないから、考える必要はない。死という言葉は嫌いだ。私には死という言葉はない。

「小池先生はとうとう死にました」



なんて絶対に言ってはいかん。幽霊で出てくるぞ（笑）。

霊的真理のためには絶対に何ものとも私は戦っていきます。その戦いの姿は、いずれ大きな詩を書きます。この詩を見れば、みなびっくりするから。私の言いたいことは全部、詩の中に告白します。私の魂は烈々たるもので、火のごとします。どんなに風が吹いても、どんなに雨が降ってもこの火は消えない、この霊火は消えない。

¹⁴ モーセ荒野にて蛇を挙げしごとく、人の子もまた必ず挙げらるべし。

これは十字架のことです。

「蛇を挙げた」

というのは、モーセの荒野でのお呪いだ。^{まじな}

¹⁵ すべて信する者の彼によりて永遠の生命を得ん為なり」

十字架で永遠の生命は来やしない。十字架は贖罪だから。十字架のあとでキリストは復活して、あの霊的なキリストに出くわしたら、そうしたら永遠の生命はくる。

「罪の贖いのために自分は死ぬけれども、甦って、それから本当に生命を与えるぞ」

と。「甦る」という言葉は私は嫌いだ。これは本当に新生、新しい霊生、霊の生命なんだ。本来も霊生なんです。本来、キリストは霊生の霊止だから、このキリストの霊生は十字架に架かったって死につこない。復活せざるを得ない。

「一体、復活したろうか」

なんてことではない。これは復活せざるを得ない。霊生また霊生を顕さざるを得ない。キリストの霊生が十字架でお終いになつてたまるかということですよ。

キリストの言葉は正直凄い。キリストの言葉を読んでいると私は嬉しくてしょうがない。パウロだとき々ややこしくてしょうがない、理屈を言うから。ヨハネはわりあいいい。パウロはもともとユダヤ教にいたものだから、ユダヤ教のくせがちよつと残っている。彼はそれを

「塵芥のごとく思う」^{ちりあくた}

と言っているけれども。キリストの十字架を土台とした聖霊の光で聖書を読みなさいよ。そうしたらもうビンビンくるから、楽しくてしょうがないから。ややこしい所はすつとばしたって構わない。時々ピリッピリッと響く言葉があるから、そういうものをちゃんとサイドラインをひっぱっておく。私は読む本にみなサイドラインを引つ張る。ひっぱってない本は読んでないという証拠です。サイドラインを引きたくないような本は読まないんだ。本を読めば本と一つになり、自然を見れば自然と一つになる。何でも魂が融合しなければダメです。

